

……エッセイ

エッセイ+140字小説

氷
砂糖



書
を
読
む

本
を
読
む

食
を
食
む

物
を
食
む

思
ひ
出
す

物
語
を
聞
く

食
を
食
む

酒
を
飲
む

書
を
読
む

書くていど

についで

積み木のように言葉を重ねたり並べたりして遊ぶ。単語を作り、違うなど崩して別の組み合わせを試し、うん、今日は乗らない日だ。小さくため息をついて言葉たちを片付けていく。お片付けは大事です。本型の缶に仕舞われた言葉たちは静かに眠り、私も今日は言葉を失おう。クラシック曲を流しておこう。

初めてお話を書いてから二十年以上になる。継続してカキモノをするようになってからでもちょうど二十年くらいだ。よく続いたよな、と思う。

長く、超短篇というものを書いてきた。500文字小説、と言った方がわかりやすいかもしれない。そこから、同人誌を作るようになり、連作短編のかたちならもう少し長いものも書くようになった。とはいえ、ぼくはもともトプリンター寄りなのだろう、校正や推敲などの直しを考えると二万字を越えることはめつたにできない。しない、ではなく、できない。人には人のキャパシティというものがあるのだ。まあそんな中で、今は140字小説、というものを毎朝書いている。一昨年の誕生日から毎日続けていて、つまりは去年に関して言えば一年間毎日書き上げたわけだ。気質としてはトプリンターだけれど、継続、ということではできないこともないらしい。

140字小説というのは読んで字のごとく、一四〇字で綴る小説のことだ。ほしおさなえという作家が提唱している定義によれば、改行なしのジャスト一四〇字、とのことなので、ぼくもそれに倣っている。

毎朝起きて、前日の家事の残りを片付けてから140字小説を書く、というのがいつものルーチンで、これやることでその日の自分のコンディションを見極めていたりする。「継続は力なり」が必ずしも真だとは思わなくても、書く基礎体力は育てているな、と自覚している。

モノカキにあるまじきことだけれど、本当に本を少ししか読んでいない。ノベルスキーという入り浸っているSNSでは日々、こんな本を読んだ、という情報が飛び交い、ぼくは少しだけ気後れしてしまう。

好きな作家はと言えば、小川洋子、原田宗典、江國香織、あたりを挙げるのだが、それにしたって著作全てを讀んでいけるわけでもない。本、という物体には圧力があつる。そこに積んであるだけでだいぶプレッシャーをかけてくるし、開くと文字がぎゅつと詰まっついてこれはまた恐れおののいてしまう。というわけで、最近の読書はもっぱらマンガや軽い新書に傾きがちだ。全く読まないよりはいいのだ、と自分に言い聞かせている。

さておき、読書という行為自体は好きではあるのだ。知らないことを知ったり知らない世界を覗いたり、あるいはその疑似体験をしたりというのはとてもわくわくすることなので。ただまあその「読書に没頭」という環境が自宅では取りにくく、もっぱらベローチェに本を持って出かけてそこで読む、ということになることが多い。カフェ読書のいいところはパソコンという楽しいおもちゃが手元にないことで、本を読むしかできなくなるのだ。あと、椅子に座って本を読めるのもいい。自宅には座れる椅子がないのだ。椅子の方が腰に優しい。おぼさんは体の調子を整えることも大事なのだ。読書に没頭できるといふ環境は、ぼくには少し贅沢な時間である。

本を読むこと

について

地下の書庫に行く。ランプの明かりを頼りに歩いているとそここから読んでくれ読んでくれと誘われるけれど、今日の目的はきみたちじゃあない。一番奥の棚から魔導書をひっぱり出す。この子はとても静かな子だ。抱えて書庫を出るときに振り向き、また今度ね、と言ってやると本棚からは歓声があがった。

恋をちねて

ちねて

胸の中で小さな芽を出した恋心は、何をどう間違ったか花も咲かせずによきによき育ち、やがて禍々しい大木になってしまった。おかしい、こういうのはバラとかが咲くんじゃないのか。問いかけても大木は風に揺られてギギギと笑う。あの人が恋人になることはないから、この恋心からはたぶん毒とか採れる。

碌な恋愛経験がない。いやまあ、ぼくは結婚していて、夫とはいわゆる恋愛結婚だったのだけれど、まともな恋愛だったかと言われるとだいたい首をかしげてしまう。

さておき、世の中には恋愛をテーマにした物語が溢れていて、そういうものが人気を集めているのを目にする、少しだけ、へこんでしまう。ぼくは恋愛小説を書くのがあまり得意でない。

読み手として好むのは少女マンガや少女小説のような恋愛模様だ。なにしろ講談社ティーンズハートで育ってきた。ティーンズハートで育ってきたのに高校生のときに姫野カオルコに出会ってしまった、恋愛観がゆがんだ。

恋愛ものを書くこと自体はある。ただ、あまり万人受けするタイプの恋愛ものではないのだろうなと思う。まあ万人受けしないという視点だと、ぼくの書くものはいいたいそうなのだけど。恋が成就したというハッピーエンドよりは成就したそのあとに続くきやつきやうふの方を書きたいし、つまりはあまり盛り上がらない。かといって悲恋はできれば書きたくない。平穩こそ幸せ、という意識があるのだろう。恋の一番おいしいところを書けないのは書き手として弱いよな、と思う。

まあもちろん万人受けを狙って書いているわけではないし、そもそも書けないだろうからあんまりぐだぐだ言っていないでしょうがないのだけれど、それでも恋愛もので人気の書き手さんが羨ましくはなるのだ。

恋愛に性愛が必要かと問われたら、そうとも限らない、とは答えるのだけれど、体で触れ合うことでやっとなることもあるよな、とは思っている。ちなみにぼく自身はわりと性欲が強い方だと自覚していて、数年前までPMSの治療として漢方薬を飲んでいたら性欲が風になつてメンタルがとても安定した。ぼくを長年苦しめていたのは性欲だったのかもしれないと思った。

というぼく自身が性的にセンチティブな描写が入った小説を書き始めたのはごくごく最近のことで、はつきりいつてとても拙い。実用的でない。実用的ではないけれど、ぼくの美学にはわりと合致していて、そのお話の中では性描写がないと成立しない、という場合が多い。

読み手としても書き手としても、好むのはいわゆる「きれいな」性描写だ。どろどろのぐちゃぐちゃの、というのはなんとというか、あまり乗れない。ただし、設定自体はわりと過激なものも好んでいたりする。要は生々しいものが苦手なのだ。いきものつてもちわるい。

頭で考えるより肌で感じたものから否応なく説得されてしまう、ということにもわりとときめく。付き合っていないのに体の関係がある、という二人を書くこともまあまあある。というか好きだ。もちろん、体験によって感情が叩き込まれる、というのは愛だ恋だの場面に限らないけれど、形から入る愛があってもいいじゃないかとも思う。可能性はたくさんあったほうが楽しい。

愛をみる(りや)

ついで

堅いチヨコレートを舌に載せる。静かに熱はチヨコレートに伝わり、頑なな壁がとろけてゆく。柔らかになった肌は形を失い、広がるのは芳醇なカカオの香りと贅沢な甘さ。あなたを解きほぐすには甘い言葉よりも即物的な熱の方がいい。長く長く味わいたい。砂糖よりずっと乱暴な存在は中毒になってしまう。

思い出

について

屋内に入ると眼鏡は一気に曇ってしまった。今日もまた寒い。なにしろ珍しいことに昨日からの雪が積もっている。散歩は気持ち良かった。拾った落とし物を玄関に置く。そのままにしておいた方が良かったかもしれないな、と思しながら。冬限定のわくわくという落とし物は雪だるまのかたちをしている。

いろいろ忘れっぽいというか、記憶力がとても残念だ。つらいことをさっさと忘れてしまえるのは得ではあるけれど、嬉しかったこともどんどんおぼろげな記憶になってしまっていくのはやっぱり寂しい。なので、嬉しかったことは記録しておいて、ときどき見返して反芻する、ということをやっている。実のところ、ブログを書いたり本を作ったりしているのもその一環である。

写真という表現媒体がわりと好きで、なおかつ女子高生時代はコギヤルだったので写ルンでずを持ち歩き、しよっちゅうシャッター音を響かせていた。このあいだ実家から当時の写真を持ってきて無印良品のとてもたくさん入るポケットアルバムに収めたところ、どうやら高校三年間¹⁸で二百枚以上撮っていたらしい。恐ろしい。

今はスマホで気軽に写真が撮れ、ぼくはぬい活もしているの、今なおあちこちで写真を撮りまくっているけれど、写メ全盛期だった二十代くらいの写真は驚くほど現存していない。写メで撮ったので当時の携帯電話のお蔵入りとほぼ同時に写真データがなかったことになってしまったのだ。だからぼくは、スマホで撮った写真も気に入ったものだけプリントするようにしている。電子データというものはとても気軽に扱えるけれど、機器がないと見ることができないし、壊れたりなくしたりするのは一瞬だ。正直、見返すこと自体は少ないのだけど、ぼくが楽しく生きていた証拠なのだよな。

小説を書いているやつが言っているのは「嘘」だと思ふ。少なくとも真実ではない。かといって嘘が価値のないものかと言えば、そういうわけでもなく、私は物語という嘘をととても大切な存在だと思つている。ちなみに真実というものもあやふやでよくわからない概念だよな、とも思つていたりする。

事実を言葉、テキストに置き換えるとき、細かなニュアンスは零れ落ちてしまう。どんなに言葉を扱うことに長けた人がどんなに気を使つても、事実をそのままの状態で言葉に置き換えるのは無理だ。と思つている。それが「嘘」。だから、ぼくが言葉に置き換えるときは無理であることを前提に補足を添えたりあるいは大胆に要素を入れ替えたりする。という手順を踏んで書きあがるのが、ぼくが書く「物語」である。重要なのは書かれていることそのものではなく、その奥にあるエッセンスなのだ。という体裁で物語を綴っているので、ある意味、ぼくにとつてはすべてがぼくに降りかかった事実なのでは、と思われる向きがあるかもしれないけれど、この「事実」の中には「これがこうだったらこうなったかもしれないなあ」という頭の中だけで進行した事象もあるのでややこしい。想像力が豊かと言えば誉め言葉だけれど、なんかよくわかんないことでグネグネ考え込んでしまうやつ、というのが実情である。ただまあ、言葉にしてしまうと自分を納得させることができる、という利点がある。

物語

にっいて

ぜえんぶ遊びなの。ごっこ遊び。仕事をしてい
るふり、恋人がいるふり、友達がいるふり、家
族がいるふり、生きているふり。おしまい、の
呪文で魔法を解けば、ぜんぶぜんぶなかったこ
とになる。楽しいのかと問われればそりゃあ楽
しい。だからもう少しごっこ遊びを続けたい。
そう、願ったふりをしながら。

食べる(じや)

について

冬は乾燥していて寒いので、感情の高野豆腐のようなもの、つまりフリーズドライを作ることができる。胸の中で大きくなった恋心は、フレッシュならではの良さもあるけれど、フリーズドライにすると歯ごたえと味わいが深くなる。調理の際は丁寧に取ったときめきの出汁でじっくり煮込むとよい。染みるぞ。

ぼくのお話を複数読んだことがある人ならまあまあ知っている事実だけれど、「食べる」という描写にこだわりがあるように見えると思う。食べることで自分が好きかと問われれば、好物なら！と返す。正直、嫌いな食べ物には山ほどある。アレルギーもいくつかあるから体質的に食べられないものもある。それでもぼくが食べることに執着してしまうのは「空腹」というストレスに耐えられない弱い生き物だからである。お腹が空くと「まちむり」という状態になる。弱い。

というわけで、ぼくにとつて「食べる」という行為は「生きていくためにどうしても向き合わないといけない」という行為であり、どうせ向き合うなら楽しみたいよね、という無駄かもしれない抵抗である。いや、好きは好きなんですよ。お肉とかお肉とかお肉とか。

そういう意味で、ぼくの書く食べる描写は、たぶんぼくの書く文章にしては生々しいものになりがちだろうなという自覚がある。しかたがない、生きることに直結しているのだから。生きることは食べること、とはどこかで耳にしたフレーズだけれど、ぼくはこれを身をもって知っている。身近な人に食道薬が多いので、いいものもわりと食べてきている。ぼく自身は不味くなければいたい許せるのだけど。それはもしかするとただの食いしん坊かもしれないけれど。美味しいものを美味しいと思つて食べられるのは心の余裕だね、と思つたりもする。

メンタルのお薬を飲んでるので、本当はあまりお酒を飲んではいけない。けれどぼくはお酒が好きなので飲む。基本的には自宅で、外で飲むときは夫に付き添ってもらおう。職場の飲み会では「飲めない」で通していた。

お酒ってロマンだよなと思う。酔うと現実と幻覚があまりいまいになるという薬理的効果もへんなものだなと思うし、それを好んで飲んで盛り上がるニンゲンという生き物もへんだ。さらにそれをモチーフにしてお話にしようとしてきた物書きたちがたくさんいたのも大変にへんなことだと思う。お酒が法的に飲めない未成年のころから、本に登場するあまたのお酒たちに憧れてきてしまったんじゃないか。一応自制として、翌日が休みの日にしか飲まないようにはしているのだけれどはえらいと思う。

一番好きなお酒はシャンパンなのだけれど、普段呑むことが多いのはビールか発泡酒、あるいはウイスキーだ。カクテルなんかもおしゃれだなとは思っただけで、あれはバーという空間で雰囲気込みで楽しむものだと思っただけで、缶入りのカクテルはちよつと味気ない。なので買うことはほとんどない。たまには飲みたいけれど。

ちなみにぼくはアルコールが入ると論理立てて文章を組む、ということができなくなるので、書き物をするときは基本的にシラフである。知り合いには酔っぱらうと筆が乗るという人が何人かいるので、羨ましくないなあとは思いつつ、今日もアイスコーヒーが相伴だ。

お酒

にっこりして

忘却の花の蜜を吸ったミツバチは、花の中で呆けていた。甘い蜜。柔らかな居場所。空は遠く、仲間のことも仕事のことも忘れたミツバチはくりくりと手足の毛づくろいをする。ミツバチに表情はないのでミツバチが幸せなのかはわからなかったけれど、花はいつか枯れ、空が雨模様になることもあるだろうに。

書き手

について

ブランデーグラスの中を魚が泳ぐ。おおぶりのグラスは、けれどやはり小さく、それでも魚にとっては世界だった。魚はグラスを通して外を見る。湾曲したガラスで外はとても大きく、そして恐ろしく、魚はブランデーグラスに守られていることを感じていた。狭くとも魚にとって自分だけの世界だったから。

物を書く人についての章だと思った？ ざんねん！ ぼくについて語る章です。つまりはほぼあとがきです。プリントしてくださりありがとうございます。

氷砂糖と言います。これは一次創作のペンネーム。二次創作だと佐藤こおりと名乗っていたり、SNSではさとう・こおりという名前を使っていたりします。アイコンは自作の魚イラストを使うことが多いので、よくわからない存在に見えているだろうなと言う気はします。SNSの一人称が「おさかな」のことも多いし。

自己イメージが魚なのは、初めて書いたお話が魚を主人公にした童話だったことが大きいです。物書く人としての初心を忘れないようにしよう、の「おさかな」です。いやまあ、魚のイラストだとぼくみたいな絵が下手なやつでもそれっぽく描けたというのも結構大きいんですが、ぼくにとって「書くこと」はストレス発散の手段の一つです。幼いころにどもり症があり、声を出して話す、ということに対してコンプレックスがありました。大学に入ってパソコンを手に入れ、キーボードで言葉を綴る、という手段を得た若いぼくは、「こんなに自由におしゃべりができるんだ！」と夜な夜なチャットサイトに入り浸り、水を得た魚のように楽しく過ごしていました。

お話というものを書くようになって、なんやかんや二十年以上になります。人生にはいろいろしんどいことも多かったです。書き続けられた、というのは自信です。

氷砂糖の居場所

- ノベルスキー
<https://novelskey.tarbin.net/@ice13g>
- Misskey io
<https://misskey.io/@ice03g>
- Bluesky
<https://bsky.app/profile/ice03g.bsky.social>
- Xfolio
<https://xfolio.jp/portfolio/ice13g>
- ダイヤモンドは甘いだろうか
<https://ice03g.parfe.jp/>

……について

2026.01.31

氷砂糖

longway12km@yahoo.co.jp